

阪田知樹さん(ピアノ)応援レポート

江口玲 & 阪田知樹デュオ

2017年6月19日(月)19:00開演
紀尾井ホール

「巨匠(ホロヴィッツ)が愛したピアノたち / ニューヨークの銘器で聴く 江口玲&阪田知樹デュオ」

◆プログラム

ブラームス:ハイドンの主題による変奏曲Op.56b	by 江口/阪田
ラフマニノフ/阪田知樹:チェロ・ソナタのアンダンテによるパラフレーズ (原曲:チェロ・ソナタ ト短調Op.19 第3楽章)	by 阪田
パデレフスキ:「ミセラネア」Op.16より 第2曲「メロディ」	by 江口
リスト:「超絶技巧練習曲」S.139, R2bより 第4曲「マゼツパ」	by 阪田
リスト:ハンガリー狂詩曲第2番嬰ハ短調S.244/2	by 江口
-----休憩-----	
ブラームス: 2台のピアノのためのソナタ ヘ短調Op.34b	by 阪田/江口

◆アンコール曲

ショパン:幻想即興曲 嬰ハ短調 Op.66	by 阪田
ドビュッシー:版画より 第2曲「グラナダの夕べ」	by 江口
ラフマニノフ:2台のピアノのための組曲 第2番Op.17より第3曲ロマンス	by 江口/阪田

この日の演奏会では、二人のピアニストによるブラームスの2曲を最初と最後に配し、その間に二人の独奏を2曲ずつ挟む、贅沢な構成。

まず、ブラームスの「ハイドンの主題による変奏曲Op.56b」から始まった。この物悲しく切なく、厳かな深い曲を、ホロヴィッツが愛し、ホロヴィッツしか弾くことが許されなかったというピアノによるお二人の演奏。純粋に、単純に、美しい旋律を宝石のような音色で聴ける幸せに感謝した。

次は、ラフマニノフのチェロ・ソナタ。阪田さんが長い間ピアノのソロ用に編曲したいと考えていたという曲。もう一つの阪田さんのソロ曲はリストの「超絶技巧練習曲」よりマゼツパ。2016年フランチ・リスト国際ピアノコンクールで優勝した阪田さんによる演奏。聴く前から興味が尽きない。

この日のアンコール曲もすごかった。お二人がそれぞれ大曲をソロで、そして最後は2台のピアノで。とてもアンコール曲とは思えない曲ばかり。アンコールだけで一つのコンサートのようなようだった。

江口先生が、舞台の上で、将来有望な若手ピアニストを慈しむかのように接していらっしゃるのが印象的だった。

お二人の演奏が終わった時は、聴衆は皆、あっけにとられたような、圧倒されたような、素晴らしい演奏に声も出ない様子だった。コンサートを3つはしごしたような、夢のように贅沢な夜だった。



この日のプログラムを見た時から、演奏者に聴きたいことが次々と浮かんできた。曲の事、ピアノの事、音楽に対するお話等。どの質問にも丁寧に答えて下さいました。普段はなかなか聞けない演奏者の生の声。知らなかった世界が見えてきます。必読！

Q.1 ホロヴィッツが来日した際には必ず選んだというピアノを弾かれてどうでしたか？

A.1 今回演奏した2台の楽器は、以前にも何度か弾かせて頂いたことがありましたが、音楽ホールにて演奏したのは初めてでした。

音域毎に持つ音色が異なり、会場でも音の響きが混濁することのない、素晴らしい楽器でしたので、演奏していて、クリエイティブに奏することが出来た一夜になったと思います。

Q.2 リストのマゼツパは、フランツ・リスト国際ピアノコンクールでも弾かれたのですか？今日の演奏は如何でしたか？

A.2 マゼツパは、昨年のリスト国際ピアノコンクールでは演奏していない曲です。この作品は、中学生の頃から演奏していた曲だったので久しぶりに演奏させて頂くことがとても楽しみでした。

今回演奏会で演奏した、かのホロヴィッツが愛用したピアノの音色が、音楽が持つドラマ性により説得力をもたせてくれたので、音楽に集中できたと思います。

Q.3 作曲も勉強していらっしゃるとのことですが、作曲の勉強はピアニストとしての阪田さんに大きな影響を与えていると思いますが、いかがでしょうか？

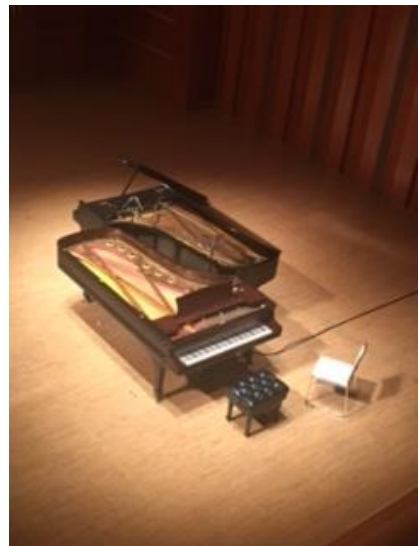
A.3 物心ついた時から自然に作曲をしていたので、私にとって、ピアノを弾くことと作曲をすること(時に編曲も含む)は、ある意味では同じように感じています。

ただ、作曲をするということは、自分の中にある思想、音楽と向かいあうことが原点にありますので、ピアノ演奏に対しても、より様々な視点で向かいあえるようになると思いますし、自分の内面をより率直に表現できるのかもしれない、と思うこともあります。

Q.4 2台のピアノで弾かれるのは、1人で弾かれるのとどの様な違い、楽しみ、難しさがありますか？

A.4 演奏者だけでなく、ピアノ毎にも音色なども違うので、同じ楽器でありながら異なる音色や音楽に対する考えを共有して、一つの作品を創り上げていくことが、2台ピアノの魅力だと思います。

他の楽器との共演とは違って、発音原理が同じ楽器であるからこそ、ちょっとしたずれがわかりやすく、合わせるのが難しかったりもしますが、ピアノ同士だからこそお互いのパートをより分かり合えるという演奏面での長所もあります。



Q.5 ラフマニノフのチェロ・ソナタをピアノソロ用に編曲されたそうですが、何故この曲を選んでピアノ用に編曲されたのですか？編曲にはどんな楽しみ、喜び、大変さがありますか？

A.5 今回の演奏会では、2台のピアノそれぞれでのソロ演奏がありました。その内片方の楽器は、ラフマニノフもアメリカで演奏会で用いたことがあったと言われるピアノでした。

ラフマニノフのチェロ・ソナタは、自分の中で昔から特別な位置を占めている作品です。常々その3楽章をピアノソロに編曲して演奏したいと思っていました。今回「ラフマニノフにゆかりのあるピアノでそれが実現出来たら」という思いがあり、この編曲作品を新たに書きおろしました。

編曲では、作曲とは異なり、元となる作品があるので、自分が感じるその原曲の良さを、オリジナルとは異なる編成でありながらも魅力を損なうことなく、寧ろより一層魅力的に、聴き手の皆様に(弾き手にも)お届けすることを考えることが、編曲をすることの目的と言えますか、編曲意欲の発端なのではと思います。

例えば今回のチェロ・ソナタの場合、本来チェロとピアノで演奏される楽曲でしたので、敢えてピアノソロで演奏することにより担当する部分が必然的に増えます。つまり要求される音の数が、原曲のピアノ・パートより多くならざるを得ない訳ですが、それにより元々の楽曲の美しさだけではなく、ピアノ・テクニクの「可能性」という別の視点からの魅力を取り入れる余地が生まれます。

上質な編曲というのは、作曲家同士の時代を越えた「共演」や「対話」のようでもあり、それが編曲することの魅力になっていると思います。

阪田さんの回答の中に、「クリエイティブ」という言葉があった。また、作曲は自分の内面をより率直に表現できる。更に、上質な編曲というのは、作曲家同士の時代を越えた「共演」や「対話」のようでもある、とあった。

編曲は、オリジナルの譜面の上に、創造性を活かし、独自性を加え、それによって自分を表現する。そして100年近く前に生きた作曲家との対話を楽しむ。また、ピアノ・ソロ用に編曲することによりピアノの音の数が増え、ピアノ・テクニクという別の視点からの魅力も聴き手に与えてくれるという。

やはり、作曲や編曲を手掛けることで、演奏者にとって更に奥の深い、幅の広い演奏が可能になり、音楽の世界が広がり、聴き手の世界も広げてくれるのだと思う。これからも様々な可能性を追求し、世界を広げ、聴き手の世界も広げて欲しい。そんな阪田さんの音楽を聴くのを楽しみに、これからも応援したい。

本日の使用楽器について



ローズウッド (1887年製)

ローズウッドの美しいボディを持つ1887年製スタインウェイ。かつてカーネギー・ホールなどにコンサート・ピアノとして貸し出されていた楽器で、その後日本に渡り、当時のキャピトル東急ホテルに所蔵されていた。1986年、ホロヴィッツの2度目の来日時このピアノを実際に弾き、絶賛したという逸話が残っている。今もロマン派の「生き証人」として、当時のコンディションを保つ貴重な楽器である。



CD75 (1912年製)

完成後すぐに貸し出し用のコンサート・ピアノとして活躍し、1970年後半にホロヴィッツ専用ピアノになる。よく鳴る枯れたボディと弦圧の低い響板。特にピアノシモの音の伸びが特筆すべきで、低音域から高音域に至るまで各セクションの鳴りムラがなく、驚くほど音量バランスが良い、類まれな名器である。

(当日のフライヤーより)

